

前任者に唯唯感謝



この人：九州大学アイソトープ総合センター病院地区
実験室及び病院地区学生実習室 古市正人氏

この人、こんな所

インタビュー担当：放射線安全取扱部会広報専門委員会
藤淵俊王（九州大学）

九州大学では、六本松キャンパスの伊都地区への移転が既に終わり、現在は本部のある箱崎地区キャンパスの移転が進行中です。その中、2011年には創立百周年の佳節を迎えています。アイソトープ総合センターは、21の国立大学にありますが、九州大学には7番目に設置されました。今回は、その病院地区事業所で放射線取扱主任者をなさっている古市正人先生にご登場いただきました。

藤淵：まず始めに九州大学アイソトープ総合センターの沿革や概要などについて紹介してください。

古市：おそらく、1950年4月に医・理・工・農各学部の教授が会員になって発足した九州大学放射性同位元素研究会まで遡ります。これは、別々の部局に所属する放射線関連の研究者が、研究協力をするためのものだったそうです。1956年に本研究会は解散し、代わって九州大学放射性同位元素専門委員会が発足しました。1960年には、九州大学医学部放射性同位元素総合実験室が、改めて作られたようです。その後、各学部を単位とした施設が併存しました。文部省（当時）は、同一大学内に数多く存在するようになったこうした放射線関連施設を

統合し、半直轄的に管理するため、1972年、ちょうど現行法に近い法令が整備された時期でしょうか、アイソトープ総合センター化を開始し、九州大学もようやく1980年4月に設置となります。箱崎地区実験室、セミ・ハイレベル実験室、病院地区実験室、病院地区学生実習室の4施設が統合されました。

その後センターは、放射線取扱教育と放射線管理を障害防止委員会と協力して行ってきました。箱崎キャンパスからは全ての組織施設が、伊都キャンパスに移転しますので、当然、箱崎地区実験室も移ることになります。本年10月には、工学部放射線施設と一緒にあった伊都地区実験室（実質新事業所）が竣工の予定で、年内には使用許可が下りる見通しだそうです。しかし、農学部はその後にも箱崎地区実験室を使用するため、3年ほどは少々縮小されて残る予定と聞いています。

病院キャンパスからは、何も移転しません。私が所属している病院地区実験室及び病院地区学生実習室は、そのままです。病院地区実験室は、主にキャンパス内の生命科学研究の支援をするための施設です（写真1）。特徴として、先代の主任者の先生が非常に早くから管理区域への入退システムに指紋認証システムを業者と共同開発採用したことが挙げられるかと思います。また、液シンバイアルの自動洗浄用ロボット等が設置されたことも挙げてよいかもしれま



写真1 病院地区実験室1棟

せん。

藤淵：主任者業務を行われるようになられたきっかけを教えてください。

古市：資格試験を受けて、たまたま合格したからでしょうか。もっと遡ると、大学の学生時に在籍した教室の雰囲気が影響したかもしれません。4年時に、RI実験をするように言われましたが、実際には大学院に進学して使用者となりました。教室では主任者資格を持つと、事故等が起きた場合、管理と関係なく連帯処罰を受けるぞ、というデマが信じられていましたが、主任者資格は能力を示すものとして魅力的なものとされていました。いつかは、取得するぞという気持ちはありました。一旦企業に就職したのですが、数年後に大学へ戻り、隣の生体防御医学研究所に職を得ました。資格取得はその後間もない頃です。そして、施設の副主任者をさせられることになりました。それから約10年後、2003年に当事業所の2代目の主任者の先生が定年退官されたので、異動の機会をいただいたわけです。人事に関しても、引き継いだ施設に関して先代の先生には感謝あるのみです。

藤淵：多くの職員や学生、留学生を受け入れら

れる中で苦勞される点はありますか。

古市：なぜか、あまりありません。留学生に対しても、基本的にはほかの学生と同様です。使用者所属の各教室で最初の指導をきちんといただいているのだと思います。軽微な実験中のトラブル等は幾つか起きているのかもしれませんが、当方の職員(写真2)と現場の使用者の方々が、とてもうまく連携してもらっているのだと思います。幸い甚大な事故はこれまで起きておりません。

毎年、再教育は全学で1,200名を超えますが、当方の担当の時には、約半数の方に来ていただいているようです。事業所の登録者は、学生を含めると現在約330名、最盛期は600名を超えていたようです。そのころはRIも年間1,000個ほど受け入れていたとのこと。当事業所も例に漏れず、最近では使用者が激減しています。実験方法の変化、研究の質の変化のため、徐々に使用量等減少傾向にありました。この2,3年の変化は、施設存亡の危機と言っても言い過ぎではないようです。今年、工学系の研究のため、電子顕微鏡が設置されましたので、近い将来、使用者の研究分野も大きく変化することも考えられます。

藤淵：古市先生自身の研究についてお聞かせください。

古市：以前は、発がん遺伝子に関わる仕事をしていました。その後、遺伝子修復などの領域で研究しました。職場は、隣の生体防御医学研究所で、ガンマセル照射装置がありましたので、個体、細胞、DNAなどのレベルで、影響を調べようとしましたが、結局X線発生装置を使い、DNA等の中の塩基の変化を調べたのみでした。結果は、実験の実施量が少なかったことでもあります。変化した物質をうまく調べることができず、残念な状況でした。目的方法は異なりますが、なんとか成果が得られたのは、教

主任者 コーナー



写真2 管理業務者の皆と

授に応援してもらい、幾つかの酸化傷害物質を質量分析器を用いて、分析定量が行えるようになったことだけと言えそうです。

現在は放射線の安全管理や教材開発を志向しています。英訳のための辞書作りを中心に、新規教育を補助するコンテンツを作成しようとしているのですが、ITの専門家ではないのでなかなかうまくいきません。恐らく法令や規則等の英訳が成果となると言ってよいかもしれません。

放射線安全管理の問題については、大きな壁があるように思います。我が国では、科学的知見に基づいて法令等が整備されて来ているわけで、いざとなったときそうしたものが機能しなければならぬと思います。しかし、先の原発事故では、想定以上の事態が起きたとされ、準備されていたこともあまりうまく動きませんでした。もっとほかに考えるべきことがあるように思います。それは、全ての前提となるものの考え方、人間性ではないかと。アメリカやフランスに滞在した経験からすると、自分の身は自分で守るという気質というか、主義が文化と

して人々に根付いており、日本とは異なるという印象です。本来、公は国民のものでしょうが、一人歩きをするので信用できなくなることが多々あります。

藤淵：福岡市の魅力についてはいかがでしょうか。

古市：インターネット検索をすると、既に多くの方が、色々と述べておられるのが見つかります。幾つかの共通した点もあり、なるほどと共感さえ覚えます。それを超えるのは難しそうですが、少し考えてみましょう。そうですね、まず、福岡市は小東京という感じでしょうか。JR山手線の駅の1つの町くらいの適当な大きさと機能的にもまとまっています。東京のように何でも手に入るわけではないですが、それなりに揃っています。九州他県からの人の流れもあるようです。若い女性の割合も多く、美人も多いとか。でも結婚していない人の割合が高らしく、残念な面もあります。2番目に、以前から重化学工業関連の工場がないため、騒音大気汚染もなく、居住環境が良好でした。最近では、中国からの飛来物が問題になって、困りますよね。また、昔は典型的な日本海性気候でしたので、冬はどんより暗く、雪が多かったのですが、最近は気候が変わり、そのようなこともなくなって来たところは、プラス点です。3番目は、定量的に述べるのは困難ですが、人々の気質を挙げることができるでしょうか。何事に対しても前向き、変化にも柔軟というか、適応能力が高いと言えるような気がします。地理的に朝鮮半島、中国大陸が近かったこと、長崎の出島の影響、また博多商人の伝統もあるでしょう、外国人に対する抵抗感が少ない、むしろ積極的に接する気質を持っているような印象があります。